店主と会計士

イーシャ・サーデサイによる再話

アルプス地方のとある所、雄大な山脈のふもとの曲線を描いた谷間に、小さな村がありました。その村のちょうど真ん中に、1軒の店がありました。それは雑貨店のようなもので、食料品からせっけん、柔らかなウールの手袋や帽子に至るまで、何でも見つけられる店でした。この村に住む人々は、この場所が大好きでした。朝には、1 斤の食パンやその日の料理の材料を求めて、人々は立ち寄りました。午後も半ばになると、ろうそく、毛糸をいくらか、風邪のための薬草など、自宅に切らした物を買い求めに、人々はやって来ました。夜にも顔を出しに来て、中にいる人たちにあいさつをしたりしました。それはお店であり、人々の集まる場であり、中心であり、皆にとってだんらんの場でした。

その店は、一組の夫婦が経営していました。彼らは結婚して間もなくその店を身内から相続したのでした。彼らの名前はハンスとフリーダで、そして彼らは村人たちから愛され、彼らの優しい瞳と気さくなおしゃべりは、傾いた木のひさしや床から天井までビッシリの棚と同じように、お店の一部として欠かせないものでした。

ハンスとフリーダは自分たちの仕事が大好きでした。それは彼らの情熱であり、自分たちのコミュニティーに奉仕する方法でした。実際、収入は決して過度ではありませんでしたが、不満の理由など全く見当たりませんでした。毎週末、彼らはページの端が巻き上がった羊皮紙のような厚紙を革で装丁した大きな帳面に、支出と収入を勘定して記入しました。必要な物は、いつもありました。幼い一人息子を養い、快適な暮らしができました。

このようにして、10 年、20 年、25 年が経ちました。村には絶えず営みがあり、ほとんど店は永久に存在する遺物のように変わらずにそこにありました。毎朝、開店し、毎晩、閉まりました。人々は、入って来ては、出て行きました。帳簿の革表紙も、年が経つに連れて柔らかくなり、色はまだらな赤茶色になっていきました。

さて、この間、夫婦の息子のアンドレアスは成長していきました。この村を越えて世界についてもっと知りたいと思い、アンドレアスは進学のために幾つか向こうの町に引っ越しました。そこで彼は、新しいアイデア、新たな観点、物事を進めるより先進的で効果的な方法を知りました。時折、どうしたら学んだことを両親のビジネスに適用できるか、どうしたらお客さんをもっとお店に引き付けるようにできるか考えていました。

アンドレアスが両親のもとに戻ったある晩、彼は父親がその日の稼ぎを数えているテーブルの所に座りました。彼はなじみの光景をじっと見詰めました。木の梁（はり）のかび臭い匂い、棚からこぼれ落ちそうなごちゃ混ぜの品々。

「お父さん？」 ちょっと間を置いて彼は言いました。

「何だね？」と、ハンスが言いました。半月型の眼鏡を鼻にちょこんと乗せて、目の前の紙幣や硬貨の山を目を細めて見下ろしていました。

「これまで…この辺りでちょっと変えてみようと思ったことはないですか？」

「変える？」 ハンスは上の空に聞くだけでした。

「そうです。いや、勘違いしないでください。お父さんがこの店でやってきたことはすごいことです。皆、この店が大好きです。ただ――僕は、ちょっと整理したらと思うのです。物事をもう少しだけ、きちんとしたらいいんじゃないかと」

ハンスは眼鏡を外すと、息子を見上げました。

「何か考えがあるのかい？」

「そうですね、まずお父さんのお金の勘定方法を見てみましょう。お父さんは今でも、僕が子どもの頃に使っていたのと同じ帳簿を使っています」。アンドレアスは、父親の方に帳簿を引き寄せました。帳簿は紙がぎっしり詰まり、とじの部分がバラバラになりかけていました。どのページも字の薄れかかった小さな走り書き、つまり過去何年にもわたってなされてきた収益の計算で埋め尽くされていました。

「分かりますか？」と、彼は言いました。「これを読むのは大変です。ましてや使うなんて。この帳簿から店の経営状態が本当に分かりますか。私たちが将来にわたって維持していけるか、商売がなすべき成長を遂げているか、どうやって知ることができますか？」

父親は驚きました。彼のシンプルな経費や支出の計算方法は、今までうまく機能してきました。しかし、息子の言うことにも一理あるかもしれない、と考えました。もう 25 年経っています。おそらく新しくする潮時なのでしょう。

「おまえはどうしたらいいと思うかね？」

「隣町に住むいい会計士を知っています。彼に頼んで、うちの財務状況を見てもらいましょう」

その数日後、店のドアをノックする音に続いて、背の低い、かっぷくの良い男性が入ってきました。男性は真っ黒なスーツと襟にしっかりと糊が効いたシャツを着て、てっぺんが平らな帽子をかぶっていました。「ごきげんよう」と、大きな声で告げました。「私はイムホーフです。私が、会計士です」。

すぐそばの棚に商品を収めていたハンスは、このイムホーフ氏にあいさつしました。ハンスが店の中を案内すると、会計士はさまざまな商品を注意深く見て、その幾つかを手に取り、たまに「ふーむ」とか、「あー」と声に出したり、「オホン」とせき払いしたりしました。ハンスには、このような音をどう解釈すればいいのか分かりませんでしたが、彼はいつも通り礼儀正しい様子で、イムホーフ氏を帳簿や伝票のある机に案内すると、お茶を出しました。

イムホーフ氏は、ぞんざいに首を横に振りました。代わりに、帽子を脱ぎ、ペンときれいな表紙の付いたノートを取り出して、仕事に掛かりました。

数時間後、彼は立ち上がって帽子をかぶりました。「さて、やることがたくさんある、数え直しと再評価がたくさんある、だが着実に進んでいる。では、また明日」

彼は次の日もそんな調子でした。そしてその次の日も、そのまた次の日も。しばらくの間、このようなことが続きました。イムホーフ氏は毎朝来て、うめいたりしかめっ面をしたりして店の中を見て回り、それから午後遅くまで帳簿を詳しく調べました。

この繰り返しが何週間か続いたある日、フリーダは夫が妙に黙り込んでいることに気づきました。それは素晴らしい日でした。暖かく、晴れて、窓を通して光が流れ込んでいました。店の中にはたくさんの人がいて、その多くは山腹でのハイキングやピクニックのために買いたい物について生き生きとしゃべっていました。

「何かあったの？」と、フリーダは尋ねました。「どうしてそんなに黙っているの？」

ハンスは額にしわを寄せ、自分の手を見下ろしました。何も答えません。

「いったい何？　私には話せるでしょう」

「会計士だ。イムホーフ氏だ」。店主の額の線はさらに深くなりました。

「彼がどうしたの？」

「昨夜帰る時に、彼が言ったのだ…」。ハンスの声はだんだん小さくなりました。

「それで？　彼に何を言われたの？」

ハンスは息を吐いて、静まりました。「彼が、うちの店は潰れると言ったのだ」

「何ですって？」と、フリーダは言いました。「いったいどうしたらそうなるの？」

「うむ、まあ、うちは実際には、今は潰れていない。でもイムホーフ氏は、うちは将来のいつかの時点で潰れるかもしれないと言った。彼が言うには、うちの店はもっと大きくして、もっと多くのお客を囲い込み、さまざまな種類の品物を扱う必要があるそうだ。そしてこれまで私たちがやってきたことは全部間違っていた、と言ったのだ」

彼は両手で頭を抱え、心底悲嘆に暮れました。

フリーダは店を見回しました。人々は狭い通路にぎっしりといて、笑ったり、話したり、必要な物を選んだりしていました。レジにはお客の列が出来始めていました。彼女は視線を夫に戻しました。

「質問をさせてちょうだい、あなた」

「なんだい」と、ハンスはくぐもった声で答えました。彼の頭は、まだ両手の中にありました。

「何年もの間ずっと、私たちはこの店を商っているわ。そうでしょう？」

「そうだよ」

「そしてその間ずっと、いつもお客さんがいたでしょう？」

「そうだよ」

「あなたはいつも請求と支出の記録を注意深く付けていた、そうでしょう？」

「そうだよ」

「そして私たちにはいつも、十分なお金があったでしょう？」

「そうだよ」

「そして私たちは、これまでずっと幸せだったでしょう？」

「ああ。とても幸せだ」

「だったら、今何が違っているのかしら？」

ハンスは妻を見上げました。彼の顔に浮かんでいた感情――悲しみ、苦悩――は消え始めました。

そして、こう言いました。

「会計士だ！」

© 2019 SYDA Foundation®. 著作権所有。